

()数字はその年の年齢(数え歳)

73

波の向こうは宋(南宋)・元・明

歴史キーワード

波

いい波(1173)くるぞ経ヶ島〈清盛大和田泊に経ヶ島築造〉

◆平安時代 承安3年 癸巳 第80代高倉天皇〈院政〉後白河上皇

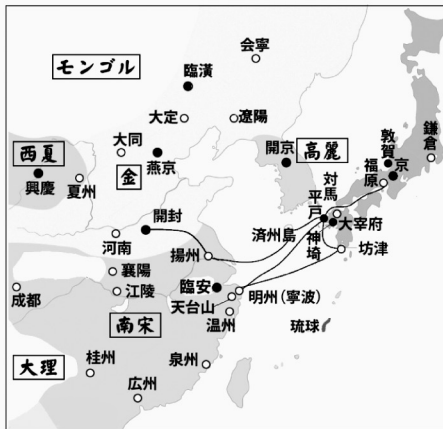


朝廷が反対する中、清盛は瀬戸内海航路を整備し宋船の乗入れを許した。

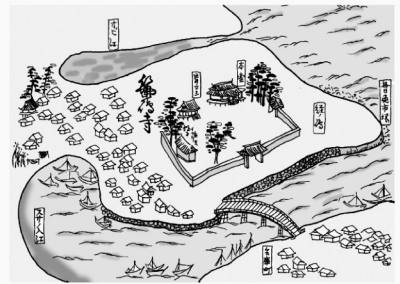


後白河法皇は蒔絵厨子、色染革、砂金で平清盛は剣、具足等を贈る。公家の中には武器を贈ることに批判もあった。

894年の遣唐使廃止後、中国との国交は途絶えるが九州沿岸の商人たちによる私貿易は続いていた。
1127年南宋の時代になると平忠盛は私貿易で蓄財をなし、朝廷に取入る。息子平清盛(56)も瀬戸内海航路を整備、宋との交易を積極的に行った。大和田泊は清盛の別荘地福原にあり、この年、後白河法皇(47)と清盛は去年来日した宋使に返礼の品を贈る。



当事、政府相手の不利な取引を嫌う宗商人は貿易の管理者、大宰府官吏の立入らない荘園と密貿易でつながった。坊津、平戸、敦賀津などが主な拠点である。清盛も肥前神崎※1で独善的貿易を行った。



現在の神戸港。平安時代は大輪田泊と呼ばれ、東南からの風波をうけ停泊が危険だった。清盛は大輪田泊の改修を行い、港の前面に防波堤となる経ヶ島*を築き船を守ろうとした。
*一切経を書いた石を沈め工事祈願が由来。

ひとつ波(1273)越え最後通告〈蒙古特使交渉決裂で帰国 翌年蒙古来襲〉

◆鎌倉時代 文永10年 癸酉 第90代龜山天皇 7代將軍惟康親王 8代執権北条時宗



元王朝初代皇帝 クビライ (1215~1294年)
日本是我々を父と思ひ服属せよクビライの狙いは南宋と親密な日本を切離し、高麗のように日本を従属させアジアを制圧することにあった



趙良弼/4回目の使者。女真人名門の出、金滅亡後クビライの傘下に入る。(趙良弼の進言)日本は山河が多く田畑が少ない、領土とするには魅力がない

前年5月より日本の国王、將軍との侯見を求め大宰府に滞在していた趙良弼は元への帰属を拒否され結果交渉に何も得ることなく怒りに震え帰国する。(翌年「文永の役」)

監修 高尾隆

※1 神崎荘…現佐賀県神崎市、代々皇室領であった。平安後期に日宋貿易のの拠点となり平忠盛一族の知行となる。

歴シル 鎌倉室町400

1573年(元龜3年~天正元年)
「室町幕府滅亡」15代將軍足利義昭京追放

いざ波(1373)越えて明使上京<義満 明との通交失敗>

◆南北朝時代 応安6年(文中2年) 癸丑 第98代長慶天皇(第5代北朝:後円融天皇) 3代將軍足利義満



(1328~1398年)

明の太祖 洪武帝

明の太祖 洪武帝



高良山に立て籠る

前年太宰府を退いた懐良親王は菊池武光と共に



聖福寺

①前年特使が来日した際、博多は九州探題今川了俊の支配下にあった。二人は聖福寺に抑留される。

1368年に建国した明の太祖洪武帝(46)の悩みの種が、倭寇による中国沿岸への略奪行であった。そこで警備の強化と外交によって日本を臣属させ朝貢国にするため、明は特使を送ってきた。しかし明が認める日本国王は懐良親王(45)だったため、義満(16)は特使に通交を望むも洪武帝には拒否される。

また明使の帰国に返礼使の閑深内宣ら同行させ、倭寇の俘虜150人を返す。しかし太祖は表文※(ひょうぶん)がないことから使者の受入れや献上を拒否する。明との貿易を望む義満だったが、認められたのは1401年明3代永楽帝になったからだった。

3代將軍 足利義満



通交なれば太祖めてたい

②6月特使は京へ上る。義満は接見、明から国王の称号をもらい通交を行うため馬や方物を太祖に献上する。

年波(1473)に勝元ならず世は宗全 <応仁の乱 東西領袖の死>

◆室町時代 文明5年 癸巳 第103代後土御門天皇 8代將軍足利義政



西軍 山名宗全



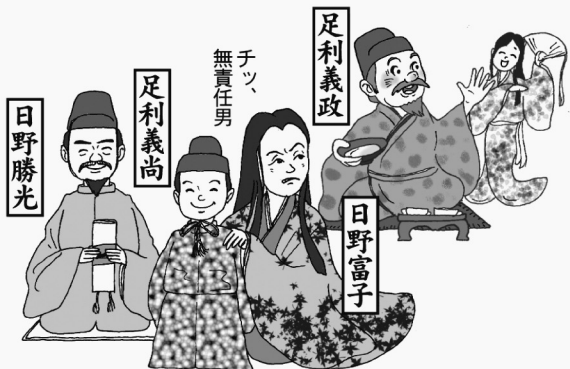
東軍 細川勝元

因縁の両雄死亡

応仁の乱勃発から8年目、都には厭戦気分が蔓延し、前年より山名宗全(西軍)と細川勝元(東軍)の間で和平交渉が始まる。しかしまとまらない中、3月山名宗全が70歳で他界すると、5月細川勝元(44)が後を追うように死去する。

当初、宗全が勝元を助けたり、勝元は宗全の娘を正室に迎える等、二人の仲は良かった。しかし赤松・畠山・斯波家の跡取り問題などの騒動や利害等により次第に対立していった。二人が死んだ翌年文明6年、勝元の嫡子政元と宗全の孫政豊が和睦を結ぶ。

9代將軍に足利義尚が就く
8代將軍足利義政(38)は12月に將軍職を辞し、元服した9歳の息子義尚に譲る。義政は引き続き政権を担う考えであったが、妻日野富子(34)は兄の日野勝光(45)を將軍代に就ける。
義政は政治にも軍事にも無能で関心がなく、連歌や茶の湯、遊宴に打ち興じるばかりで、妻子とは遠ざかり無責任な隠遁將軍であった。



日野勝光

足利義尚

チツ、無責任男

足利義政

日野富子

※2 表文…国王が臣下として皇帝に奉る公式な文書のこと。明からすると義満は北朝の天皇の臣下(陪臣)でしかなかった。